



Title	藤川隆男先生の退職を記念して
Author(s)	津田, 博司; 堀内, 真由美; 森本, 真美 他
Citation	パブリック・ヒストリー. 2025, 22, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102065
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

藤川隆男教授退職記念特集

藤川隆男先生の退職を記念して

津田博司

本特集では、大阪大学西洋史学研究室で長らく教鞭を執ってこられた藤川隆男先生のご退職にあたって、先生のご指導を受けた卒業・修了生を中心として、先生との思い出をふりかえる文章を寄稿してもらいました。藤川先生と出会った時期や間柄、出会ってからの年数などは執筆者ごとに様々ながら、それぞれの関係性から語られる先生とのエピソードは、それを実際に経験したわけではない読み手にとっても、まるでその場に居合わせたかのような、いきいきとしたものとして感じられることと思います。大阪大学へのご赴任以来、藤川先生は数えきれないほどの学生や同僚と関係を結んでこられたわけですが、その過程の主たる断片がここに記憶として提示されていると言つていいかもしれません。

藤川先生がオーストラリア史の研究者として多大な貢献をなさったことは改めて述べるまでもないものの、本特集の執筆者、あるいは先生から公私の指導を受けた人々の多くは、オーストラリア史を専門としているわけではありません。むしろ幅広い分野を横断するかたちで、藤川先生と研究上の直接的な関わりのない老若男女、様々な経験の人々に影響を与えておられる事実こそが、先生のお人柄と求心力をよく示しているのではないかでしょうか。執筆者の視点からの回想に續いて、本特集は藤川先生ご自身による解説で締めくくられます。これらの寄稿文による「対話」を通して、大阪大学西洋史学研究室での実体験を有する人々にも、そうでない人々にも、藤川先生の紡いでこられた歴史の豊かさに触れていただければと願っています。

藤川隆男先生の教え

堀内真由美

藤川隆男先生（以下、藤川先生あるいは先生と記す）は、ああ見えて、とてもきっちりされている。とくに締め切りに対してシビアだ。先生が編者となって出版された『アニメで読む世界史』（山川出版社、2011）の中の1章分を担当させてもらった際、「エライ先生でもない皆さんのが締め切りを守らないということはありません」と私たち教え子に明言された。草稿が出来上がった頃、再びお達しがあった。校正に関して、「プロからの修正要求には必ず応えましょう、そうすれば必ず良くなりますから」と。

「年に論文1本と研究報告1回」という就職時に頂戴した課題。「報告」に関しては守っていないが、締め切りは守り、査読付きであろうと無かろうと、先方（出版社の編集者氏、論集の編集担当氏、査読者氏など）の修正要求に必ず応える。「早目に書いて修正もできてよかった」と思って少し安心できる。先生の教えが効いている。効きすぎて、「何も言ってもらえなかったらどうしよう」と毎回ビクつく。

もう20年以上前、博士論文作成中にこんなことがあった。書き始めて4年。ほぼ中身も書き上がった。確か神戸大学で開催された日本西洋史学会の控室。カンガルーの皮製キャップ（野球帽）、ジーンズに「サラリーマン革靴」という藤川先生の「正装」にも目が慣れた私は、一息つかれている先生に近づき草稿をお渡しした。数十分かけて読んでくださり一言。「やっぱり堀内さんが書いてた元の章の順番に戻そう！」「序章もなんかしつくり来ないから堀内さんの自分史から書き始めよう！」とおっしゃるではあーりませんか！？

その数か月前、先生との面談で章構成の変更が決まってから、書いていて多少の違和感はあった。だが元の方が良いとも思えなかった。一方、序章はどこか「取り繕っている感」が否めず、書き手の実感の伴わない文章になっていた。「論文らしく書く」という圧力に勝手に潰されていたのだろう。先生から「最近のとくにジェンダー史論文や著作では、筆者の経験から書き起こされているものが多い」と助言をもらった。おかげで、中学校現場のジェンダー問題に気づき教師を辞めてジェンダー史の勉強を始めた私は、勉強を始めるまでの経緯を冒頭で説明できた。そして無事、序章が完成了。ただ、章の入れ替えは、入れ替えたらオッケーでは済まないので、この作業にはもう半年弱かかった。それでも、自分が考えた「元の章構成で書いている」という責任感と気概で乗り切れた。

藤川先生は、くだんの控室での博論最終確認で、「も一回やってみよう」、「ごめん、もうちょっと時間かかるけど」、「でも、絶対今よりいいものができるから」と言られた。あの日のケッタイな「正装」以上に、先生の指導学生への柔軟で率直な姿勢が忘れられない。何冊も著作があり、何十回も海外を含めた学会で報告された人物だ。だからふと忘れてしまいそうになるけれど、きっと論文指導に何百時間も労力を割いてきた人なのだ。

さて、もうすぐ後期授業が始まる。卒論指導も佳境だ。私は毎年、先生から受けた「教え」を思い出し、謙虚に率直に学生と向き合う。だが上手くいったと思うことは少ない。継続が力になることを信じるしかないのが教え子として情けない。藤川先生、また教わりに行っていいですか？

笑う藤川先生

森本真美

私にとっての藤川先生は、長らく謎の先輩でした。学部時代は藤川先生がオーストラリアに留学しておられる時期にあたっており、大阪大学西洋史研究室の先輩たちの間での断片的な話題のみで、そのイメージを膨らませていました。

初めてお会いしたのは、夏休みの研究室だったように記憶しています。見慣れない方に挨拶をしただけの一瞬の遭遇で、あとでそれが藤川先生だと知りました。大阪で言うところの、いわゆるそのシュッとした佇まいは、聞きおよんでいた諸々のネタ話とは乖離していて落差にとまどいましたが、それもしばらくのことでした。

藤川先生は、やはり噂の藤川先生でした。ニコニコ笑いながら洒落にならない毒を吐き（言われた当人が気づいていないというシチュエーションがお好み）、ツッコミどころのない自慢話（文武両道ヒーロー自伝）で周囲を困惑させる。そのくせ学会発表では、よそ行きの柔らかい口調で大胆な自説を述べ、とても若手とは思えない堂々とした態度で質疑応答の場を制する。ゆるく見て隙のない、他人に真似のできないスタイルは、思えばその頃すでに確立していました。

遠距離通学だけで疲弊し、さっぱり勉強しない学部生だった私は、なぜかうっかり大学院に残ってしまったのですが、帝塚山大学に就職されていた藤川先生から非常勤を紹介していただくという身に余る恩恵にあずかりました。在外研究中にお預かりした藤川ゼミの学生たちはみな溌剌としていて、オーストラリアの大地のようなおおらかさで個性を大切に育てられている様子がうかがえました。恩師・川北稔先生のそれと通じるこの「放牧」的な指導方針だけは、私も兄弟子から引き継いだと自負していますが、いかんせんスペックと器の違いのために、学生に振り回されるだけの「遊牧」となってしまっています。

その後私が西洋史研究室の助手をつとめていたごく短い時期に、藤川先生は新任の助教授として母校に戻ってこられました。風貌も雰囲気も院生時代とほとんど変わらず、研究室を訪れた書店の営業マンが大学院生と間違えて、先生はお留守ですかと帰ってしまったこともありましたが、その反応を本当に楽しそうに見ておられました。

楽しそう。そう、藤川先生は人をおちよくり煙に巻き、成功するとヒヤッヒヤッと声をあげて本当に楽しそうに笑われるのです。ほぞをかんでも相手が一枚も二枚も上で、かつ反論の余地がない正論なのでどうしようもありません。ただ、してやられて悔しい時にはこう思うことにしています。笑われるだけよかったです。こちらが本当に困っている時や弱っている時には、藤川先生はとても真面目な顔で話を聞いて下さいます。でもそれは、状況がこのうえなくまずいということなので（ちなみに阪大の話をされる時は、いつも真顔でした）、笑っていない藤川先生は、笑われるのが自分であってあまり見たくはないのです。

藤川先生はよく、宝くじが〇億円当たったらすぐ退職するわとおっしゃられていました。このたびご無事に定年退官の日を迎えるようですが、本当にくじ運が悪かったのかどうかは、セカンドライフのご様子からうかがい知れるのではないかと勘織っています。ともあれ今後もお元気で、笑顔で一撃を見舞ってはヒヤッヒヤッと笑い転げる、そんなイジワルな藤川先生でいてください。

藤川隆男先生の思い出

並河葉子

藤川先生にはじめてお会いしたのは、わたしが博士課程に進学した1995年春、ちょうど先生が阪大に着任されたときだと思う。「だと思う」というのは、もう30年ほども前のことなので、今一つ記憶が定かではないからだ。

とにかく、ある日大学に行くと、茶色いレザーのベストとデニムの細身の若い先生がおられた。それからすでに30年ほど経つ今に至るまで、藤川先生はこのスタイルのままである。まるで時が止まっているかのように錯覚してしまうが、確実に時が流れているのを実感するのは、藤川先生とのお話しに出てくるお嬢さんのゆかりさんが、最初は小学生だったのが中学生になり、高校生になり、いつの間にかすっかり立派な大人になられたということを通してだ。それにしても、わたしはいつも先生と一緒に何を話していたのだろうかと思うほど、研究の話を長々とした記憶はない。お会いすると、とりとめのない日常の話ばかりしていた。

とはいっても、私がその後なんとか大学で仕事を続けてこられたのは、院生時代の数年間に先生からいくつか貴重な助言や指導をいただいたからで、本当に感謝している。藤川先生らしいのは、いかにも指導という形を取らずに、何気ない会話を交わしている中に、さり気なく大事なことを伝えてくださるところである。それでも、本格的な指導をしていただいたことももちろんある。修士論文をなんとか書いた後、投稿論文の書き方もよく分からずに仕上げた最初の投稿論文の草稿を見ていたいたいたときに、とても細かく丁寧に修正ポイントを示してくださった。論文としての体裁、言葉の選び方を含めた表現のイロハも含めて、真っ赤に直していくこの原稿は、今でも大切に手元にとってある。院生の論文は、その都度指導教官が見てくださるものなのだと思って、次の原稿も持って行ったら、いかにも藤川先生らしい言葉が返ってきた。「そんなん最初の一本だけや。これからは自分で考えなあかん。」いつまでも学生気分のわたしは、目が覚めたというのか、いやはや大変だと思った。それでも、修士論文を書いた後のテーマがなかなか見つからなくて、長く悶々と過ごすことになった。それを見かねてなのか、ご自身の研究プロジェクトに誘ってくださったりして、さっぱり研究が進まない私を、気長に見守ってくださった。この場を借りてあらためてお礼を申し上げたい。

先生というより、先輩といった風情でいつも穏やかにこれまで研究室を支えてくださっていた先生が定年退官をお迎えになるというのは本当に寂しい。ふらりとやってきて、本気なのか冗談なのか分からぬ口調で、いつも何かしらパンチの効いた皮肉っぽいことをおっしゃる藤川先生にこれからも研究室でお会いしたいという思いはあるのだけれど、それよりも、これまで研究室を盛り上げてくださったことへの感謝と労いをお伝えしたい。

本当にありがとうございました。そして、お疲れさまでした。

藤川隆男教授の思い出

酒井一臣

藤川先生がご研究と教育に多くの功績をあげられてご退職になるのはおめでたいことであるのはもちろんですが、私個人としてはさみしい限りというのが率直な気持ちです。私は、西洋史研究室でお世話になりながら、日本外交史を専攻し現在にいたるというはみ出し者ですので、ここに何かを書くのはおこがましいのですが、ひとこと藤川先生の思い出を記します。

藤川先生が阪大の西洋史研究室にご着任の折、私はまだ学部生でした。お兄さんのような先生がいらしたなと思いました。当時、故合阪先生の授業のお手伝いで資料のコピーをする係でした。ある日、合阪先生が授業資料を片手に「藤川君、コピー」と仰り、私が慌てて「先生がされなくとも」と言うと、「かまへん、かまへん」と当然のように資料の準備をされたことが印象に残っています。

私は、日本外交史のテーマで卒論を書き、別の大学の修士課程に進学したのですが、博士課程で阪大に戻ってきました。入試の面接で、「あいかわらず英語できへんなー」と先生が爆笑されたのを覚えています。先生は、頑固に日本外交史をつづける私の将来を危惧してくださったのか、日豪関係史をしてみてはどうかとお誘いくださいました。それだけでなく、ご家族で毎夏オーストラリアに滞在される際に同行を許してくださいました。

キャンベラの史料館で「この人英語できないんですけど、読むことだけは何とかなります」と紹介してくださり、アーキビストが目を白黒させていたことを苦笑とともに思い出します。ご家族の団らんにもお誘いくださいました。ドライブの時、当時小さかったお嬢さんのお相手でひたすら「しりとり」をしました。英語が苦手で、海外経験のない私をいざない、なんとか研究者のタマゴにしようと、先生は苦心されました。ところが、「酒井君は、史料みててもすぐに飽きて、帰ろうと誘いに来るんやな」と呆れられました。先生のご教導を無にしたうえ、そして今も研究にすぐ飽きる自分を振りかえり、あらためてお詫びしたいと思います。

私がいう必要もないことですが、藤川先生のご研究は、頭が固い研究者の枠組みを壊すタイプです。思い切ったことをされる以上、誰からも文句を言わせまいとの迫力があります。その迫力をウイットと柔軟な文体で隠されます。『人種差別の世界史』では、大阪弁のツッコミが入るという衝撃の文体でした。指導する学生にも同じでした。私は先生が強面で指導されるのを見たことがありません。いつもユーモアたっぷりのツッコミが入るご指導です。くわえてそれぞれの適性を伸ばそうといろいろな工夫をしてくださる。私は、先生の工夫を活かせなかったダメ研究者ですが、当該分野で日本を代表するような、私の後輩にあたる研究者をお育てになりました。一つ後悔があります。私は一度も先生の授業を履修しなかったのです。それを考えると、私は先生の思い出を語る資格はあるのでしょうか。

藤川先生、これまでどうもありがとうございました。これからも、誰もが思っているのに言ってくれなくなったら、「酒井君は英語できへんから、あかんなあ」と笑ってくださるのを待っております。先生のご健康をお祈りし、私を含む先生の後輩と阪大西洋史研究室をずっと見守ってくだることをお願いいたします。

藤川先生と西洋史学研究室

水野祥子

藤川先生と初めてお目にかかったのは、文学部のソフトボール大会だったと記憶しています。ひとり大きな声で相手チームにヤジを飛ばす大学院生（とおぼしき人）がいましたが、大学院に進学した後に、その人物が新たに着任された藤川「先生」だと知り、びっくりしました。藤川先生は、その親しみやすいお人柄から、学生にとって何でも相談できる頼もしい兄貴分のような存在でした。研究室で、われわれの進路や研究に関する真剣な話ばかりでなく日常的な雑談にもつきあってくださった先生のご様子は、今でも鮮明に覚えています。藤川先生に教えを受けた学生は、それぞれに楽しい思い出をもっているのではないでしょうか。

授業では、演習で「オーストラリア辞典」（藤川隆男編『オーストラリアの歴史—多文化社会の歴史の可能性を探る』有斐閣、2004年所収）を作成したことが印象に残っています。自分の担当する項目について文献を調査し、限られた字数で説明するという作業は、新鮮かつ面白い経験でした。独自の観察眼で世相を斬るコメントが炸裂する藤川先生の講義も、懐かしく思い出します（何かの折に「5分に1回、笑いを取る」と豪語されていましたが、あながち嘘ではなかった）。

また、院生時代の投稿論文から博士論文の出版まで、いくつもの原稿に目を通してください、多くの助言や示唆をいただきました。コメントが書きこまれた原稿を見返すと、当時の自分があれこれ悩みながらも藤川先生のアドバイスのおかげで何とか前に進むことができたことを再認識します。ご指導にあらためて深く感謝申し上げます。

助手を務めた3年間は、院生の時とはまた別の角度から藤川先生のお人柄に触れたように思います。日ごろから学生にとことん寄り添い、つねに西洋史学研究室の運営に細部まで心を配っておられました。かく言う私自身も、阪大坂を下りながら悩みや愚痴を聞いていただき、励ましていただいた一人です。

藤川先生が大阪大学にいらっしゃる最終年度に集中講義に呼んでいただいたのはたいへん光栄なことでした。久しぶりに味わう研究室の雰囲気は、私たちが学生の頃と変わらず自由で活気にあふれていました。思えば、先生方と学生たちの距離が近く、研究室で親しく会話を交わすことは、阪大西洋史のよき伝統でした。研究室を取りまく環境が変化していくなかでそれが守られてきたのは、藤川先生のご尽力の賜物だと思っております。

ご退職後には日本とオーストラリアを行き来しながら、何か新しい、面白いことを発信してくださるのではないかと予想しており、それを楽しみにしています。最後にもう一度、これまで本当にありがとうございました。

オーストラリア史への誘い

津田博司

私が学生として藤川先生のお目にかかったのは四半世紀前、今で言うところの ICT 教育を取りするかたちで、藤川先生が研究室にまとめた数のノート PC を導入して、授業を通じたオンライン辞典の編集などの試みが軌道に乗ろうとしていた頃です。学部生から大学院生までの間に「コンピュータ係」という管理者の役割をいただいたおかげで、藤川先生が従来の歴史学を超えたパブリック・ヒストリーを志向して以降、近年取り組まれてきたデジタル・ヒストリーの手法が芽吹くまでの過程を、結果として間近で目にすることができました。他の受講生が登校する前に藤川先生と授業の準備をしながら、例えば前日の院ゼミ発表の反省会など、公私様々な話をさせていただいたことが思い出されます。偉大な歴史家との時間を独り占めする経験は、ぜいたくで楽しいものでした。

藤川先生のご尽力によって、私が在学中の研究室では、学生の出入りが妨げられず、教員・学生、先輩・後輩の垣根を越えて会話する雰囲気を満喫することができました。卒業論文で研究する分野を思案していた私は、ドイツ語を学んでいた影響で、当初ハプスブルク帝国における多文化共生に関心がありました。藤川先生は覚えておられないでしょうが、研究室での雑談で「オーストリア史やるんやったら、ハンガリー語とかチェコ語できなあかん」などとお言葉をいただいた結果、素直な私は「英語だけで何とかなりそう」なイギリス帝国史に心変わりすることになります。その後ほどなくして、ドイツ語だけでもハプスブルク帝国を研究することは可能、イギリス帝国でもカナダ史にはフランス語が必要といった衝撃の事実が判明するものの、藤川先生の誘いでオーストリア史からオースト「ラ」リア史へ転向したおかげで、私は大学院以降の人生を決定づける幸運な出会いに恵まれました。学会などの研究に関わる事柄はもちろん、ときにはワインを傾けながらの食事など、オーストラリア滞在中に藤川先生とご一緒した場所や出来事は数えきれません。きっかけはやや不純ながら、藤川先生の何気ないひと言から始まったオーストラリア史との付き合いは、飽きることなく続いています。

藤川先生のご研究は世論形成などの「対話」を対象とされていますが、私にとって先生との会話は学びの宝庫でした。自分自身が大学教員となった今、卒業論文や研究に思い悩む学生と出会うことは、珍しくありません。藤川先生ほどの知性と笑いに満ちた時間を演出することは難しいものの、ときには先述のような先生との思い出を紹介しながら、かつての私と重なる悩みを抱えている学生との相談に臨んでいます。直接的にオーストラリア史を選択する学生は少ないとはいえ、例えは私とオーストラリア史との出会いのエピソードは、世代や関心を異にする現在の学生にも、それなりに興味深く聞いてもらえるようです。私が大学で出会う人々は学生として、研究者として、あるいは一人の人間として、それぞれの喜怒哀楽を経験していくわけですが、藤川先生が私たち教え子を常に温かく見守ってくださったように、自分も学生にとって有意義な出会いを重ねていきたいと思っています。

藤川先生ありがとうございました

松田祐子

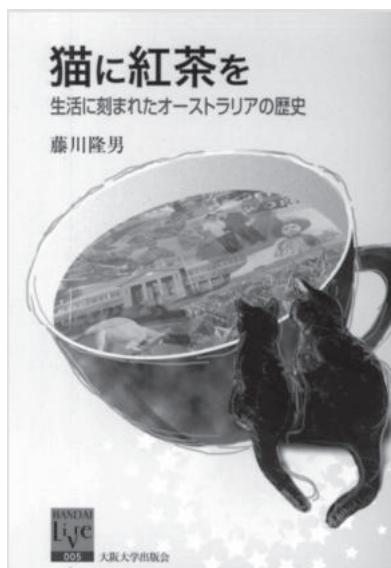
私が藤川先生に初めてお会いしたのは、1998年2月大阪大学大学院文学研究科に入学するための面接試験の時です。大学を卒業してからすでに23年のブランクがあり、研究がしたいという思いだけで受けた試験でしたが、これが私の人生の転換期となり「幸せではあるけれども何かものたりないもやもや」を感じていた「主婦」としての生き方に目を向け、フランス女性史を研究する出発点となったのでした。当時は先生方の御名前も御専門も知らなかったのですが、「英文和訳がよくできていました」と言葉をかけてくださったのが、藤川先生だったと思います。そのおかげで緊張がほぐれてほっとしたのを覚えています。しばらくして偶然電車で一緒にいる機会があり、先生がオーストラリア史の研究者なのを知りました。西洋史研究についての私の知識は1970年代前半でストップしていたので、ヨーロッパやアメリカではなくオーストラリアを専門にしておられることに軽い衝撃をうけ、未知の世界に飛び込んだことを実感した瞬間でした。当時の藤川助教授は若く新進気鋭の西洋史学研究室のホープでした（私の中では今も変わらなく若々しいイメージのままですが…）。それから大学院生として在籍していた7年間とその後の数年間、講義やゼミに出席し研究室でのおしゃべりにも加わり、藤川先生のユーモアあふれる温かい人柄に触れたことを懐かしく思い出します。

私は大学院で「主婦」の体験を生かした研究に取り組み、フランス近代の女性史を軸として、近現代の女性の在り様に関心を持つようになりましたが、長い間「家庭」に閉じこもっていたので、関心を持つテーマについて何が言われているのか、どのような本や論文があるのか、また社会の問題を歴史的に分析する方法を知らず、無手勝流にすすめていたのです。そんな折、ジェンダーにも深い関心をお持ちである藤川先生に出会えたことは幸運でした。例えば、1999年後期の演習のテキストは Lynette Finch 著 *The Classing Gaze: sexuality, class and surveillance* でしたが、このテキストを読み討論に参加することで階級やセクシャリティにかかる歴史学の概念や言葉を学び、新しい知識を吸収することができたのです。その他の演習や講義も人種やパフォーマンスなど根本的でありながら今も矛盾を含むテーマが題材でした。また、当時は新しい方法であったパワーポイントを使った発表や英語での討論など藤川先生の授業は常に刺激に満ちたものでした。

とりわけ博士論文執筆と拙著の出版の際には大変お世話になりました。私は博士論文の執筆を期限ぎりぎりまで遅らせていて、提出まで残り三か月になってようやく原稿をまとめ藤川先生に見ていただいたのですが、身内の不幸が重なったこともあり、とても混乱した原稿だったと思います。それにもかかわらず先生は快く対応し、すばやく適切なアドバイスをしてくださいました。また翌年には、拙著の出版を内容にふさわしい「阪大リーブル」シリーズを選んで大阪大学出版会にかけあい、章の組み立てから言葉の選び方、細かな校正まで助言していただきました。この時に著した『主婦になったパリのブルジョワ女性たち』について、藤川先生は「僕の本（『猫に紅茶を』）より売れている」とおっしゃっているそうですが、もし本当にそ

うであれば、その評価の半分は藤川先生のおかげです。今でも拙著を読んだ読者からの好意的な感想を漏れ聞くと、私がまがりなりにも研究者として第二の人生を歩むことができたのは、藤川先生との出会いがあったからこそだと感謝しております。本当に有難うございました。ちなみに『猫に紅茶を』は書店のペットやお茶の棚に分類されていたらしいという噂もありますが、これはオーストラリアの歴史の本です。

図 『猫に紅茶を—生活に刻まれたオーストラリアの歴史』 大阪大学出版会、2007年。



1999年冬「研究室のドアをノック」がすべての始まり

安井倫子

2000年、大学院前期課程に入学して以来、もう20年以上、いまだに藤川先生の「ゼミ生」です。歴史学というもののイロハから、PCの初步、論文の書き方、研究発表の手順、そして史資料の集め方、読み方・・なにもかも、藤川ゼミで手ほどきを受けました。

とんでもない社会人院生でした。院ゼミでの研究発表の「大失敗」は数え切れません。その都度、藤川先生との「禅問答」が私を「奈落の淵」から救い出してくれました。

「その土地と人びとの臭いも嗅いでこそ、歴史が書ける」との言葉に押され、フィラデルフィアのケンジントンにも、勇気を出してフィールドワークに行くことができました。そこから、私の研究が飛躍しました。

藤川先生にいただいた珠玉の「お言葉」は数え切れませんが、三つだけ、ここに記しておきます。

「中学生に授業するように、分かりやすい言葉で、分かりやすく説明する」・・当時、私は中学校の教師でした！！

「学術論文に『そして』はいらん！」・・「そして」を省くと、なんとすっきりすることか。以来、みんなに伝授しています。

「苦節12年の苦労が実りましたね」・・博論公開試問の場です。不覚にも涙がこぼれました。苦労というよりは、幸せでした。「第二の人生」を与えてくださいました。大阪外大での指導教官から、「あなたにピッタリの先生だから」と紹介していただき、先生の研究室のドアを文字通りノックしたことが蘇りました。

藤川先生、ありがとうございました。私がここにあるのは、先生のお導きのおかげです。

「そして」、厄介な安井ですが、これからもよろしく、ご指導ください。

研究室とわたしを繋いでくださった藤川先生

内山敬

藤川先生に初めてお目にかかったのは、たしか先生が大阪大学に赴任して来られた 1995 年 4 月、わたしが大学院に合格しそこねて 1 年間研究生をやっていた頃だろうか。研究室の大先輩として何度かお名前だけは伺っていたし、学部生時代にヘルプで駆り出された西洋史学会でお顔を見る機会くらいはあったかもしれないが、初めて顔と名前が一致するかたちでお会いしたのはこのときだ。

瘦躯、飄々とした雰囲気は今と全く変わらない。演習講義に出席すると、教材は前世紀のオーストラリア入植者が先住民について記した同時代資料とその解説だった。英文は現代のそれと比べてはるかに難しく、婉曲表現や込み入ったレトリックが連続するためまともに英文研究書を読み出してまだ数年のわたしには荷が重かった。苦心しつつ訳していると先生が私を遮り、いつものように飄々と、しかし明確に誤解を指摘し正しく訳してくださいたるものだ。

わたしはその後修士をいただいただけで大学を離れ（だから先生にご指導いただいた期間はほんの数年だ）、東京で翻訳業界に入ることになった。しかし研究室の雰囲気は忘れがたく、一年に一度は研究室に遊びに行った。在籍時の面々はしだいに数を減らしていくがそれでも誰かしら残っていたし、新しい後輩と話をさせてもらい、話題に花が咲いたこともあった。何よりも藤川先生がそこにおられた。学生として在籍したときとは異なり、仕事のうえでの苦労話なども聞かせてくださるようになり、いっぱいの職業人として認めていただけたのかな、などと鳥滸がましいことを考えて勝手に喜んでいたものだ。

ある年、研究室に遊びにゆくとその日はたまたま院ゼミの日だった。たくさんの方とお会いできたと喜んでいたら、思いもよらず、藤川先生が院ゼミの聴講を勧めてくださった。ろくに勉強もしなかった私などをいまだに受け入れてくださるのが本当にうれしく、大喜びで出席させていただいた。

いつからだろうか、藤川先生が毎年始めて OB 会を主催してくださっている。この OB 会は藤川ゼミの OB 会をベースにしてはいるものの、藤川先生門下でもない、ロシア史や中世史の面々まで普通に出入りしている、要するに阪大西洋史在籍経験者なら誰でも OK というユルい会だ。会場も元々は研究室開催、食べ物や飲み物は多くが持ち寄り。はっきりした開始時刻もなくユルく始まり、頃合いになると藤川先生がユルく挨拶。出席者は同年代ごとになんとなく固まりつつ研究室の好き勝手な場所で歓談し、たけなわになると先生がコンロで肉を焼いて振る舞ってくださったりと、ユルさ極まりないがなんとも居心地がよい。近年は毎年、年末にくる OB 会の告知を楽しみに待つようになった。

わたしが研究室を離れて、今年で 25 年になる。研究職にも、教職に残るのでもない私のような者でも四半世紀にわたり研究室と繋がりを持ち続けられているのは、藤川先生が（きっと苦心して）維持くださった阪大西洋史研究室のオープンな雰囲気、そして先生ご自身の包容力のおかげだと強く思っている。

教員としての礎

中西雅子

私は大阪の私立高校で世界史を教えていました。藤川先生の研究室に入った最初の学生の一人です。

藤川先生といえば、「常に面白いことを探している」。オーストラリア辞典を皆で作り、ネット上にアップするというプロジェクト。今でこそ珍しいことではないかもしれません、20年以上の前のことです。このように「面白いことをせんと」としゃっちゅう言っておられた気がします。もともと別の時代を考えていましたが、藤川先生のお話が面白く、藤川研に移ろうとしました。私が移ることで、その代はその時代を専攻する学生が絶えてしまい、藤川先生に「悪の権化だ」と言われました。もちろん笑いながらですが。私はその後無事に藤川先生のもとで勉強することができました。

藤川先生の根底にある優しさと公平さに後から気づくことが多々ありました。学生たちと同じように気さくに喋っておられますが、研究室全体を見て、皆が快適に過ごせるよう気を配つておられました。毎年恒例の新年会でもそう。これだけ長い間続いている新年会、藤川先生が楽しい場を作ってくださるからだと思います。また、困ったときは必ず適切なアドバイスを。レポート、卒論・修論も必ず添削してくださいました。それが今私が生徒に行う小論文指導につながっています。私が教員になってからも、高校生の研究室訪問をすぐに受け入れてくださったり、英語による発表の実践方法を教えてくださったり、卒業してもずっと気にかけてくださいました。高校教員の職が決まり、最後にご挨拶にうかがったら、「不勉強な大学生を教えるより、優秀な高校生を教える方が良い選択かもしれない」とおっしゃっていただいたことは今でも覚えています。私は研究者でやっていくことはできないと思っており、その時は前向きな気持ちで高校教員の職を選んだわけではなかったのですが、その言葉を聞いて救われたと思いました。

懺悔を一つ。3回生の時、オーストラリアの開拓者の日記を読むゼミがありました。毎週指定された日記を事前に読み、当てられた人が1節を要約していきます。当時の私たちにとっては毎週の英文の量が半端なく多い。誰が言い出したか覚えていませんが（私ではありません！）、みんなで分担して要約を紙に書き、そのコピーでその場を乗り切ろう作戦が決行されることになりました。皆カンペを隠し、当てられたらこっそりカンペを見ながら、要約を発表していました。ごめんなさい！！！少人数のゼミのため（8人？）教室も狭く、恐らく藤川先生は気づいておられたと思います。その作戦の効果は2つありました。実はその作戦はすぐに自然消滅。人が要約したものでは結局よくわからないので、そのうちみんな自分でちゃんと読むようになり、英語を読むスピードが格段にあがったこと（本来のゼミの目的）、もう一つは同期の結束力が急速に高まったこと。よく飲み会を開いてくださったのもあり、仲が良い学年でした。卒論の中間発表会のとき「やばっ！」となって、自分たちで勝手に第1.5回中間発表会を開き、先輩たちを巻き込みあたふたしているのを、ニヤニヤしながら見ておられました。

高校教員をやっているなかで藤川先生ならどうされるだろうと思うことや、先生から学んだことが根底にあると感じることが多くあります。その生徒の先を思ってどのように対応すればよいのか。先生の教育姿勢やお人柄には足元にも及びませんが、私も生徒に「恩送り」をできていればと、この文章を書きながら改めて思いました。ここに書ききれなかったことも含めて藤川先生には本当にお世話になりました。ありがとうございました。

図 オーストラリア辞典

出典 <https://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/bun45dict/index.html>, 2025/1/13



一貫性と正義：藤川先生から学んだこと

小林ハッサル柔子

最初に藤川先生に大阪大学でお目にかかった際、「小林さん、Florey なんですね。」と言われた時、「？」と思い、正直なところ、”Who is he?”と内心で尋ねてしまいました。オーストラリアは島国でありながら、その広さはアメリカに匹敵するため、オーストラリア研究者といつても必ずしも何かを共有しているとは限りません。しかし、日本に、私の地元にまで詳しい先生がいらっしゃるとは驚きました。その後、キャンベラのオーストラリア国立図書館でフェローとして調査を行っていた際、偶然にも日本人研究者が調査をされており、なんと藤川先生でした。ここで、藤川先生が私よりも遙か以前からキャンベラに関わっておられたことが判明し、大変驚きました。先生はまさに大先輩がありました。

そんな藤川先生と仕事を通じて関わる機会をいただき、私は多くのことを学ばせていただきました。先生の学術的な卓越性は言うまでもないことですので、ここでは人間として先生から学ばせていただいたことを申し上げたいと思います。それは、言動と実践を一致させるという一貫性、すなわち「正義」です。例えば、「ジェンダーギャップの解消」を掲げることは誰にでもできますが、それを大学人としての実践にどれだけ反映させるかは全く別の問題です。女性であっても男性化したような女性が大学の重要な地位を占める現代の大学で、多くの言動不一致者が、表面的には理念を掲げてフェミニストを気取ります。しかし、藤川先生は自身の実践を通じて、地道に、そして着実に、あらゆるギャップを「下から」なくすための取り組みを進めておられました。先生が小さなことを積み重ね、日常の景色を少しづつ変えていかれるその一貫性と正義には、ただただ頭が下がる思いです。

そのような生き方を身近で拝見できた私は、先生の姿勢を手本にしながら、アカデミアがより健全で、より多くの人々に開かれた場所となるよう努力してまいります。もちろん、言葉にすることは容易ですが、実際に実践することは難しく、ダメ人間な私は多々へたれて、雨の降らない時のキャンベラの植物のようにしおれてしまうこともあります。しかし、そんな時は、先生の背中を思い出し、一貫性と正義を大切にしながら、また歩み始めたいと思います。

これからはお時間もできることと思いますので、ぜひまたキャンベラでお目にかかるれば幸いです。お茶を飲みながら、さまざまなお話を伺い、さらに多くのことを学べることを楽しみにしております。

30年間ありがとうございました。

藤川 隆男

以上。これですべて言い尽くされていると思いますが、その解説文を以下に記したいと思います。阪大の西洋史研究室には、学部3年の時から博士の1年までお世話になりました。その後2年間はオーストラリア国立大学のMA、帰国後すぐに帝塚山大学に就職しました。そこで8年間過ごし、①気鋭の②愚鈍な（正解を選べ）の助教授として阪大に戻り、それから30年なんとなく幸せに大学生活を送り、現在に至ります。

着任時、最初は30人くらいの学生を演習に集める川北先生がいらっしゃったので、なんとか立派に暮らしていくくらいの学生を集めたいと励むうちに、徐々に人数も増え20人くらいで演習を行えるようになりました。川北先生とオーストラリア時代のD.W.A.ベイカー先生が、私の教師のモデルでした。しかし、学生集めをするうちに、歴史の教育方法にも興味を持つようになり、学生あるいは各個人が主体となる歴史を構想し、インターネットを利用した辞典や年表、本誌『パブリック・ヒストリー』の導入などに手を染めました。先日、歴史教育研究会で気鋭の研究者、徳原拓哉さんから、なぜ日本で誰も関心を抱いていなかった早い時期にパブリック・ヒストリーに関心を持ったのかと聞かれて、うまく答えられなくて、つらつらと考えていたのですが、その答えのようなものです。ところで、阪大文学部で最初のインターネット講義の準備を始めて、20世紀中に10回の講義を配信しましたが、その頃ネット証券もすでに始めており、西洋史研究者最初のネットトレーダーになったかもしれません（の一人と書くと正確）。

同時期に研究のほうは、オーストラリア史を志向しながら、白豪主義と中国人移民の研究から、先住民や女性史の研究に領域を拡張し、人種・ジェンダー・階級を包括するようなホワイトネス・スタディーズ（白人性）（「白人性の賃金」は白人男性労働者の賃金ですが）へと進みました。その頃、研究会に呼んでいただいていたご縁から、民博の松山利夫先生に、民博で研究会を主宰するように促されて、丸抱えで白人性研究の研究会を立ち上げ、2005年に本としてまとめることができました。振り返ってみると、オーストラリア留学後に入った近代社会史研究会は、南直人さんのお誘いで参加し、オーストラリア学会は、関根政美さんの強硬な勧誘で参加、日本西洋史学会は自動加入、イギリス帝国史研究会は入会した記憶はないのですが、なんとなくメンバーになりと、おおよそ主体性のない学会・研究会活動でした。たぶん基本的に見知らぬ人、見知らぬ場が苦手だからでしょう。外界の刺激に反応して生きるアーバーのようなものです。

阪大に戻って最初の10年が過ぎると、見習いから小番頭に出世し、中番頭を経て、最後は大番頭で退職と、西洋史研究室の灯を守ってきたと勝手に思っています。ところで、思ったことを口する悪い癖があり（皆さん普通は言わないことを言いたくなるので）、「西洋史学はなくなるだろう」とか、たぶん「存在する理由はない」とか言っていたので、逆に自分がいる間に西洋史研究室が衰退したり、自分が代表の時に雑誌『西洋史学』が不振になったりするのは、なんとなく嫌だなと思っていました。天邪鬼という性格もあり、ちょっと複雑です。その結果、自分の意向とは関係なく、西洋史の存続に自分なりに尽力するような不思議な時期を過ごしてきました。奇妙、不可解、支離滅裂な感じですが、それも嫌というわけではありませんでした。なんで第70回日本西洋史学会大会の責任者をしているんだろうと思っていたが、延期、延期、オンラインとなって、新規さにワクワクしました。オーストラリア史にとって、西洋史学はあってもなかっても大差はないので、それもまあいいかという感じもありました。

その後の研究のほうはというと、航海の研究（陸から見た海の歴史がはやりですが、本当の海の歴史）をしたり、成果は何も出しませんが、靴の歴史に興味を抱き、世界三大履物博物館を訪れたり（かわいい歴史とかも調べ、本の表紙絵を作家さんに発注しましたが、未受領。）、オーストラリアの伝説的怪物バニヤップの歴史を研究したり（フランスの航海日誌に詳しくなりました。）、スポーツの歴史を研究したり、関心のある領域を飛び回ったりしていました。その間、コロナが始まるまで毎年オーストラリアに1か月くらい滞在し、必要な史料などを集めっていました。

少し落ち着いて取り組んだ研究は、オーストラリア全土6州2準州の主要な博物館を150くらい回った歴史博物館の研究があります。関連領域に、歴史戦争や歴史的賠償があげられます。足で稼ぐ歴史。これに続くのがスポーツクラブを中心とするオーストラリアのクラブ文化の歴史です。しかし、しばらく続けていると、面白そうだったデジタル・ヒストリーを用いたパブリック・ミーティングの研究が途中で割って入ってきて、中断。本当の文理融合研究、英語でやり取りする国際的研究チームを経験し、『オーストラリアの世論と社会—デジタル・ヒストリーで紐解く公開集会の歴史』としての本の出版が、私の大学人としての研究の最後になりました。余談ですが、スポーツクラブを中心とするオーストラリアのクラブ文化の歴史には未練があり、大学人生最後の2年間、続けて同じテーマで科研に応募しましたが、2度続けて落ちました（挑戦的領域でも出したので実は3回）。最後の申請書は、生涯で最もよく書けた申請書だと思いましたが、惨敗でした。そういう結果ですので、科研の申請を見て欲しいという類のメールが毎年複数送られてくるのですが、無駄な行為ですので、今後は送らないようお願いします。今でも、スポーツを通して、グローバルなメディア資本の支配から、競技の統括団体を介して、クラブに依存するローカルなコミュニティーまで連なる歴史を描ければ、眞のスポーツ史、少しあは現代世界の歴史を眞の意味でグローカルに描けるのではないかと思っています。日常生活とグローバルな世界がつながるという感覚はメディア抜きでは考えられないでしょう。

ところで学生さんたちとの遊び、PCを20台以上使用し、オーストラリア辞典や年表、英語

の失われた地名辞典 the Ghostly Gazetteer of Australia、オーストラリアの町の紹介ネットケリーなどを構築する作業は、すごく大変でしたが、楽しい時間でした。大学院の学生さんとは、いっしょに翻訳したり、『アニメで読む世界史』、『アニメで読む世界史 2』を作り上げたりしたのが、良き思い出です。森本慶太さんには、作成秘話のネタで登場してもらいましたが、もうそういうことがないのは非常に残念です。文院協のソフトボール大会についても一言、60代になると、還暦後最後のホームランを打ちたいと、打席ではいつもホームラン狙いでいたが、もう無理かなと思い始めた時、64歳で最後のランニングホームランを打てました。無欲の勝利というか、これで、大阪大学の生活で思い残すことになりました。30年間ありがとうございました。

一生かかっても処理しきれない集めた大量の史料は、断捨離によってほぼ処分しました。ただ一つ心残りがあります。オーストラリア先住民の拘留・獄中死の問題に関する王立調査委員会が、99人の死者に関する個別の報告書を出版しており、そのうちのクイーンズランドだけの分について成果を発表し、その全体像を示せないままに終わっています。調査委員会は、その他に全国報告書だけでも大部のもの5冊、州別の報告書、証言録など膨大な関連資料を刊行しており、成果をすぐに要求されるこの時代、今後おそらく誰もこのテーマに挑む人はいないと思います。しかも先住民の拘留・獄中死の問題は、未解決の課題です。その処理をできればよいなとは思いますが、断捨離に励んでしまうかもしれません。

退職後、研究はしません。他の大学にも行きません。非常勤もしませんと言うと、何をするのですかとよく聞かれますが、ようやく退職するのに何かしないといけないですか（無能な政府の回し者ですか）と、言いたくなります。幸いなことに、自宅の隣に70坪ほどのオーストラリアの植物の庭を造り、その奥にある家で庵を営むことになりました。つまり退職後は、庵主になります。庵主の仕事は何ですかとか（馬鹿ですか）、聞かないように。この庵、今のところ、豪縁園自遊庵と名付けるつもりです。オーストラリアの植物に囲まれた庵、来年の3月～7月頃、庭は花で満たされる予定です。2階には、風呂トイレ洗面のついたセミダブルベッド2台のある部屋と6畳の和室があり、お客様をお迎えできるようになっています。すでに今年11月半ばから弟夫婦の滞在予約が3週間ほど入っています。続いて恒例の新年会も庵で開催したいと思っています。

退職後は、死を見つめながら、残された束の間の生の時間を楽しく、陽気に過ごしていきたいと思います。皆様、これからも、人見知りの庵主と仲良くしてください。庵には気軽に立ち寄りください。ただし海外に行くことがありますので、訪問前にメールをいただければ、「残念」ということがなくてよいかと思います。

2025年1月1日
藤川隆男（自遊庵・庵主）

【特集企画を担当して】

この特集は、藤川隆男教授がこれまで大阪大学西洋史学研究室の内外で積み重ねてこられた「歴史実践」の一幕を書き残そうという意図で、企画されました。本誌『パブリック・ヒストリー』は、藤川教授の発案で生まれ、今にいたるまで、藤川教授のバックアップのもと成長してきました。その発刊の趣旨は、これまでの各号からうかがい知ることができます。第1号「『パブリック・ヒストリー』創刊にあたって」では、なぜパブリック・ヒストリーという名が与えられたかが記され（扉）、第17号では、「『パブリック・ヒストリー』とは何か。」が論じられています（論文、12–24頁）。理論的な射程のみならず、パブリック・ヒストリーを実践するうえでは、それぞれの立場を尊重し、ひとを大切にすることが重要であると考えます。この特集で多くの方が触れておられるように、藤川教授は身近なひとつを大切にする姿勢を貫いてこられました。第2号に掲載された、「特集 社会人入学女性大学院生」（73–103頁）を読むと、藤川教授が意識して社会人にも開かれた歴史実践の場を作ろうとしてこられたことが伺えます。こうした背景があつてこそ、パブリック・ヒストリーの実践が成り立つのではないか、そうしたことを考えつつ、本特集を企画いたしました。

企画者のひとりである森井は、歴史学を専門としない学部から博士前期課程で藤川先生のゼミに入れていただきました。歴史学のイロハを教えていただいたことはもちろん、先生がつくられた場のなかで、研究の仕方から仕事の仕方まで、トレーニングしていただきました。博士論文執筆まで、想定以上の時間がかかり、大変なご心配をおかけしました。しかし、状況に応じた的確なご指導をいただいたおかげで、進むことができました。心より御礼申し上げます。この特集が、私（たち）が経験した藤川先生の歴史実践の一端を伝えるものになっていますように。そう祈りながら、ここに藤川隆男教授退職記念特集をお届けいたします。（森井一真）

～ ～ ～

もうひとりの企画者である杉山は、これまで社会人として多様な現場において、一貫して集団の関係改善に関する実践に従事してきました。いずれの現場においても、制度上の合間や狭間に置かれた現状に向き合い、家族社会学的な観点から考察・追究してきました。特に高等教育機関で女性研究者支援に取り組む中で、多数の職種・複数の立場（ジェンダーや階級・障害の有無）のコンフリクトの解消について考えていたところ、現在の指導教員である藤川隆男教授の研究に触れました。本誌第2号で掲載されている「特集 社会人入学女性大学院生：狩獵・ピアノ・女学校・フェミニズム・人種」を拝読したこと、藤川教授のもとで研究を希望する後押しになりました。

長年、人種主義を研究してきた藤川教授は、私の目指す研究者です。高度な実証的な史料分析能力に加え、国際的な研究の動向を踏まえ、パブリック・ヒストリーという研究の方向性を日本へ導入しました。歴史学は過去への眼差しだけではなく、現在およびよりよい未来の構想にも資するという日本の歴史学を変える重要な論点を提示しました。

他方で、現在の高等教育機関では教育研究の能力だけではなく、多様な学生や教職員に接する必要があります。学生の力量を踏まえた的確な指導と、それぞれの学生の事情を考慮したコミュニケーションを行う場面を拝察してきました。私自身も、歴史学研究の新たな展開を担い、俯瞰して事象を捉える力をもった研究者を目指します。

企画にあたって、西洋史学研究室の先輩の皆様には多大なるご協力を頂戴しました。この場を借りて篤く御礼申し上げます。最後に、指導教員の藤川隆男教授には、大学院生として受け入れていただき、研究からお笑いまで、多岐にわたるご指導をいただきました。あらためて感謝申し上げます。
(杉山暁子)